

五二二三 (次行)

〔循環鱗比〕

五二二四

萬物は成壞し、給資を用う有り、  
衆期は始終し、旺衰を爲る有り、

五二二五

循環する者は氣象なり、

五二二六

鱗比する者は氣質なり、

五二二七

循環する者は、各期 相い定まる、故に之を推すに、  
會違は數を出でざるなり、

五二二八

鱗比する者は、各期 定まる無し、故に之に従うに、  
變化は豫す可からざるなり、

五二二九

氣象は運轉し、天を周り地を周る、其の機は違わず、  
參差の中に整齋す、

五二三〇

日を爲し年を爲し、章を爲し紀を爲す者は、  
歲なり、整齋の中に參差す、

五三三一

象質は升降し、天を行き地を立つ、  
其の機は定らず、

五三三二

風雷雲雨、木壽豊儉なる者は、  
運なり、

五三三三

是を以て循環する者は精なり、

五三三四

周周は端無きなり、

五三三五

生化は相い接す、

五三三六

始終は相い依る、

五三三七

鱗比する者は麓なり、

五三三八

一過して跡を顯にす、

五三三九

起滅して始終を爲す、

五三四〇

旺衰して新故を爲す、  
而して

(PB 374, I 436b)

五二四一  
 五二四二  
 五二四三  
 五二四四  
 五二四五  
 五二四六  
 五二四七  
 五二四八  
 五二四九  
 五二五〇  
 五二五一  
 五二五二  
 五二五三  
 五二五四  
 五二五五  
 五二五六  
 五二五七  
 五二五八  
 五二五九

生せい化かの天てん地ちに通つうずるに於おいては。則すなわち隔へだてざるなり。故ゆえに

各かく體たいは立たび立たつ、

衆しゅう期きは相あい追おう、

各かく體たいを大だい體たいに比ひするに、大だい體たいは無む垠ぎんなり、

人ひとは數すうを立たて、而しかして后のち、物ぶつ體たいの廣こう狹きやう小しょう大だいを比ひ方ほうす、

衆しゅう期きを長ちやう期きに比ひするに、長ちやう期きは無む際さいなり、

人ひとは數すうを立たて、而しかして后のち、經けい歷れきの久きう近きん長ちやう短たんを比ひ方ほうす、

人ひとは已すでに立たつ所ところ有あり。彼かの循じゆん環かん鱗りん比びを觀みる。

循じゆん環かんは定てい度ど常じやう期き有あれば、則すなわち

各かく行かうを計かぞえて而しかして會かい離りを定さだめんと欲ほつす、曆れきの起おこる所ところなり、

鱗りん比びは定てい度ど常じやう期き無なくば、則すなわち

歲さい月げつを係かけて而しかして長ちやう短たんを比くらべんと欲ほつす、壽じゆの用もちうる所ところなり、

天てんに長ちやう短たんの各かく期き有あり、

人ひとは奇き偶ぐの數すうを設もうけ、乘じやう除じよして之これを計かぞう、

物ものに參さん差しの變へん化か有あり、

人ひとは書しよ數すうの技わざを設もうけ、連れん綿めんとして之これを記しるす、蓋けだし

天てんなる者ものは測はかる可べからず。

人じん巧こうは接せつ物ぶつの方ほうを窮きわめんと欲ほつす、故ゆえに

衡こうを立たてて輕けい重じゆうを辨べんじ。

五二六〇

量を立てて多少を知り。

五二六一

度を立てて長短を測り。

五二六二

漏を立てて久近を分つは。人の設なり。蓋し

五二六三

處なる者は、天動地止の處なり、

五二六四

虚する者は遠く浮く、

五二六五

實する者は近くに沈む、

五二六六

遠浮近沈は共に露す、

五二六七

立つ者は能く容れ能く載す、

五二六八

載の微は、此の廣大を露す、

五二六九

時なる者は、神爲天成の時なり、

五二七〇

前なる者は將に來らんとす、

五二七一

後なる者は引て去らんとす、

五二七二

將來引去は共に隠る、

五二七三

當る者は隨いて見れ隨いて隠る、

五二七四

當の忽は、此の攸久を成す、

五二七五

物は、中を守りて立ち、外に向いて通ず、

五二七六

神は、今に當りて活し、後に向いて息む、

五二七七

物は通じて體を失う、

五二七八

神は息して跡を留む、

(PB 375)

五二七九

五二八〇

五二八一

五二八二

五二八三

五二八四―八六

五二八七―八八

五二八九

五二九〇

五二九一

五二九二

五二九三

五二九四

五二九五―九七

五二九八

五二九九

五三〇〇

\* 五三〇一―〇二

五三〇三

跡あとを留とどめて神しんは息やむ、

機きを發はつして神しんは活かつす、

統散とうさんして各おのの神しんを有うす。而しかして小しょうは則すなわち大だいに資とる。故ゆえに

機きは發はつして絶たえず、之これを生せい生せいと謂いう、

跡せきは收しゆうして已やまず、之これを化か化かと謂いう、

循環じゆんかんなる者ものは、往復おうふくして期きを爲なす、始はじまる者ものは終おわる、終おわる者ものは始はじまる、

鱗比りんびなる者ものは、生せい死しして期きを爲なす、死しする者ものは息やむ、生せいする者ものは繼つぐ

天物てんぶつは長存ちやうぜんの體たいなり、

地物ちぶつは每換まいかんの體たいなり、

存換そんかんは同おなじからずと雖いえども。彼ひし此おなは同おなじく通中つうちゆうに生せい化かす。故ゆえに

體たいを存そんする者ものに於おては、則すなわち歳さいと曰いい、曆れきと曰いう、

體たいを換かうる者ものに於おては、則すなわち場ばと爲なし、壽じゆと爲なす、蓋けだし一いちなり。故ゆえに

循環じゆんかんする者ものに於おては、漏ろうを置おきて時じを刻こくす、

日にちの一周地いっしゆうちの頃けいを、一いっぴやく百ひゃくと爲なす、月げつは天てんを周めくる、日にちは天てんを周めくる、

東西とうせい兩線りやうせんの相あい旋めくるは、頃けいを此これに資とる、故ゆえに

會離かいりの紀きは、亦また此これに成なる、

鱗比りんびする者ものに於おては、則すなわち歳さいを定さだめ日ひを立たつ、

日にちの一周天いっしゆうてんの頃けいを、歳さいと爲なす、歳中さいちゆうは明暗めいあんを會かいす、月つきを置おき日ひを置おく、

長短ちやうたん天壽てんじゆの經歴けいれきは、此これに於おて資とる、故ゆえに

(1437a)

五三〇四 今 循環する者は、人の資る所に就きて之を言え、則ち

五三〇五 日の一周地は一百刻、

五三〇六 月の一周地は一百三刻、

五三〇七 日の一周天は、三萬六千五百二十三刻にして贏る、

五三〇八 月の一周天は、二千七百五十五刻にして贏る、

五三〇九 天の成る所を以て之を言え、

五三一〇 各各一期にして、期は定まるに由りて、推す所を逃れず、

五三一〇 鱗比する者は、人の資る所に就きて之を言え、

五三一〇 長壽は千萬歳にして、

五三一〇 短期は夕を崇めず

五三一〇 或いは數十歳、或いは十數日なり、

五三一〇 天の成る所を以て之を言え、

五三一〇 各各一期、歲月の定期に比す、

五三一〇 此の長短を察するを得る、故に

五三一〇 奇偶を相い置ねて。十を紀し百を紀す。皆な天の數に非ざるなり。

五三一〇 蓋し天地は大にして全、

五三一〇 萬物は散にして小、

五三一〇 全なれば則ち神本は力 敵す、敵すれば則ち持す、

五三一〇 持すれば則ち久し

(PB 376)

五三二四一二五

散さんずれば則すなわち神本しんほんは力りき 偏へんす、 偏へんすれば則すなわち傾かたむく、

五三二六

傾かたむけば則すなわち顛たおる

\* 五三二七

衆期しゅうきの壽じゆを天地てんちに於おいて争あうこと能あたわざる所ところなり。

五三二八

天地てんちなる者ものは物ぶつを以もつて成なる、

五三二九

象質しょうしつなる者ものは性せいを以もつて成なる、

五三三〇

象しょうなる者ものは色しきを爲なして見みる、

五三三一

質しつなる者ものは性せいを爲なして露ろす、 故ゆえに

五三三二

日月景影にちげつけいえいは、 色しきを虚中きよちゆうに於おいて見みす、

五三三三

水火溼燥すいかしつそうは、 性せいを實中じつちゆうに於おいて示しめす、

五三三四

天地会易てんちいんようの物立ぶつたちて。 星辰せいしんは上うえに散さんず、

五三三五

動植どうしょくは下したに聚あつまる、 而しかして

五三三六

星辰せいしんは循環じゆんかんの物ぶつなり、

五三三七

動植どうしょくは鱗比りんびの物ぶつなり、

五三三八

循環じゆんかんする者ものは其その期き 攸久ゆうきゆうなり、

五三三九

鱗比りんびする者ものは其その期き 斯須ししゆなり、

\* 五三四〇

鱗比りんびの中なかにも亦また神本しんほんに長短ちやうたん有り。

五三四一

本氣ほんきに富とめる者ものにして、 而しかして能よく久きゆうなり、

五三四二

本氣ほんきに乏とほしき者ものにして、 而しかして能よく短たんなり、

五三四三

神氣しんきに富とめる者ものにして、 而しかして能よく變へん化かす、

(1437b)

五三四四

神氣しんきに乏とほしき者ものにして、而しかして變化へんかに拙つたなし、

五三四五

其その錯綜さくそうに至いたりては。則すなわち

五三四六

實物じつぶつ攸久ゆうきゆうと雖いえども、而しかも鹵輦動植ろぜんどうしよくと壽じゆを爭あらしう能あたわず、

五三四七

雲雨うんう倏忽しゆへつと雖いえども、而しかも朝菌ちやうきん蟄蟻じつぎは、旦夕たんせきを持じせぜ、夫それ

五三四八

地ちは止とどり天てんは行いく、

五三四九一五〇

天てんは令れいし地ちは奉ほうず、是こゝに於おいて天てんは日月にちげつを率ひきいて、明暗照蔽めいあんしょうへいす、

五三五一

地ちは從したがい天てんは行いきて、寒熱肅舒かんねつしゆくじよす、

五三五二

人ひとは其その事じを紀きして曆れきと曰いう、乃すなわち晦望會離かいぼうかいり、晝夜冬夏ちゆうやとうかの事じなり、

五三五三

時じは移うつりて物ぶつは換かわり、人ひとは運うんし事じは變へんず、是こゝに於おいて

五三五四

萬物ばんぶつ變動へんどうの事じ、人世じんせい換革かんかくの態たいは、其その事じを紀きして史しと曰いう、乃すなわち

五三五五

日月山河にちげつさんが、人物じんぶつ鳥獸ちようじゆうの事じなり、是こゝを以もつて

五三五六

各周かくしゆう・各轉かくてん・各期かくきを爲なす者ものは、天てんの曆れきなり、

五三五七

各周かくしゆうを相あい比ひし、其その久近きゆうきんを方くらべ

五三五八

止地しちに立たちて轉天てんてんを觀み、規矩ぎくを建たてて、會違かい違を正ただす者ものは、人じんの曆れきなり、

(PB 377)

(PB 378)